

母の 658 ひろば

doshinsha / haha no hiroba

こどものメイゲン⑧ 2
わたしの原風景⑦／伊藤秀男 3
物語をつむぐということ／山本悦子、いとうみく 4
新刊紹介／河野哲也 6
織茂恭子、高橋秀雄 7

イラスト／高橋和枝



12歳の孫たちに語る

早乙女勝元

つい先頃、池袋駅近くの小学校から、6年生の社会科に東京大空襲の話を、という依頼があった。同校同学年には孫もいるので、引き受けて準備のメモを取り始めた。現在の6年生は、ほとんどが12歳だという。それでは私の12歳はどんなだったのだろう。

昭和20年を迎えた時、私は国民学校高等科1年生の12歳だった。早生まれだったせいか、クラスで1番のチビだった。勤労働員では隅田川沿岸の鉄工所のトロッコ押しだった。子どもには非常識な重労働に、空腹と手足が凍結するような寒気が加わった。学童は空襲警報と同時に帰宅してよいことになっていたが、もしものことがあったら、工場も学校も責任をとれなかったのだろうと思う。米軍の長距離重爆機B29の空襲は昼夜休みなしで、もはや東京が危険とみて疎開する人が絶えなかったが、わが家にはなんの伝手もなかったのだ。そうこうしているうちに、あの夜がやってくる。

昭和20年3月10日、東京の下町地区は300機からなるB29の無差別爆撃で、文字通りの火の夜となり、10万人もの生命が失われた。私ら一家は、リヤカーに寝具と台所用品などを積んで逃げたが、路上は小山のような荷をつけた自転車に大八車などで、ごった返していた。おそろしく北風の強い夜で（B29はわざわざそういう時を狙った）人びとの荷が空中に舞いながら散乱し、鍋も釜も焼けたブリキ板などが、風を切って飛来してくる。

「あ、落ちてくる！」 すぐ前を走っていた親子連れの男が叫んだが、とたんにあたり一面に数えきれないほどの火柱が屹立した。男は身に付着した火焰を消そうとして路上を駆け回り、3歳くらいの少女が立ちすくんでいたが、その子を助けるゆとりはなかった。次の瞬間、猛火の渦は彼女を火だるまにしてさらっていったが、あの子はどうなったことだろう。親の手から離れたのが今生の別れになったのではないか。そういう子どもが、どれほどいたことかと、今でも気になって仕方ない。「君だけは生き残らせてやるから、この夜のことを決して忘れずに……」 そんな声が耳もとをかすめて、私はこくんとうなずいたものだった。

私の12歳は東京にしながら、生きるも死ぬも紙一重だったのだ。それを12歳の孫たちに語ろうと思う。

(さおとめ かつもと／作家)



こどものメイケン 8

■自宅にて、外で雷が鳴っているのを聞いて

— おへそ、隠したほうがいいんじゃない？

「かみなりさまって、

おうちのかぎ もってるの？」

はっとする子どもの一言を、シチュエーションを添えて、お寄せください。氏名・住所・電話番号・お子さんのお名前と年齢・お子さんのお名前の掲載の可否を明記のうえ、童心の会(p8)まで。掲載させていただいた方には絵本を1冊プレゼントいたします。

わたしの原風景

7

伊藤秀男

画家／絵本作家



イラスト／伊藤秀男

目の前には大きな川があった。うしろにも小さい川があった。僕が生まれた家は、川と川にはさまれていたのだ。だからいつも水を思い出す。今でも水辺が大好きだ。水辺を描くとうれしい。

時々、大きな川を、ぼんぼん蒸気が上ってきた。ぼんぼんという音と共にドーナツのような白い煙が流れていく。時には船のりさんが橋の欄干に船をつないでオカへ上がってきた。僕の家は川っぶちで小さな店を開いていたのだった。毎日夕方になると、村中からお客がやってきてひとしきりにぎわう。父は「イカはいかほどいかがですか…」などと皆を笑わせて、五ツ玉の大きなそろばんをばちばちはじく。

店の前の堤防では、樽などにこしかけ、夕暮れの川風に吹かれて、何人かがコップ酒を飲んでいる。毎日のようによれよれの着物でやってくる、大将というあだ名のおじさんは、酔いがまわると、となりの人にいつもの冗談。「あんたんとこの時計は、チョッキン、チョッキン、わしの時計は、シャッキン、シャッキンと鳴っておるわ、ワッハッハ」

吠かまに入った塩を指でひとすくいしてなめながら、おじさんたちは、川を眺めては飲んでいた。

大方お客が去ると、父は「今日は合戦だったわな」と自分も一杯商売物の酒を飲む。

まだ電話がなかったので、川向こうの蔵元まで注文の書きつけとお金をつつんだふろしきを背中にくくりつけてもらって、お使いに行く事があった。「ようけお金が入ってるでおとしゃあすなよ」と母は僕を送り出した。無事つくと、白いカバーのかかったソファのある立派な応接室に入れてもらって、上等のお菓子があたりするのだった。酒蔵をのぞくと大きな酒樽が並んでいたのを思い出す。以前宮沢賢治の『税務署長の冒険』という作品を絵本にする仕事をしたとき、作品の中の村の酒屋や村人、又ドブクロの樽が並ぶ村人の密造酒小屋を描くとき、僕はこれらの事をいろいろ思い出しては描いたのだった。

ともに童心社の人気読み物を手がける作家の山本悦子さんというみくさん。三年前から親しくされているというお二人に、対談をしていただきました。

——作家を志されたきっかけを教えてください。

山本（以下山）…小学校五年生のとき、友だちが物語を書いているのを見て、「お話って書いていいんだ」と気づいたんです。家に帰ってすぐにノートに書いて、翌日友だちに見せました。

ある日車に乗っていた主人公が、友だちを見かけた瞬間に心が入れ替わり、直後に車は事故に遭う。自分の代わりに友だちを死なせてしまったと思った主人公は、時間が戻る薬を作り、友だちの人生を取り戻そうとするという話でした。

当時はSF作品に夢中で、『時をかける少女』『などの転校生』など、少ないお遣いで買ひあさっては暗記するほど読んでいました。

いとう（以下い）…私が最初に書いたのは、小学校三年生のときでした。本より外で遊ぶのが好きだったんですが、一週間ほど入院することになったとき、手持ちの本や漫画も読んでしまつて返屈して、「自分で物語を書いてみよう」と思い立



物語をつむぐ

山本悦子 × いとうみく

ということ

やまもと えつこ／愛知県生まれ。作品に『先生、しゅくだいわすれました』『神隠しの教室』（野間児童文芸賞、以上童心社）『夜間中学へようこそ』（岩崎書店）『おかわりへの道』（PHP研究所）など多数。

いとう みく／神奈川県生まれ。作品に『糸子の体重計』（日本児童文学者協会新人賞）『かあちゃん取扱説明書』（以上童心社）『空へ』（日本児童文芸家協会賞）『車夫』シリーズ（以上小峰書店）など多数。

ったんです。きつねとうさぎが仲良くなる、というような単純なお話でした。それから「私もお話が書けるんだ」と思えて、「夢は童話作家」と言うようになりましたね。

——その後どうやって作家になられたのですか？

山…私はその友だちと高校を卒業するまでお話の交換を続けて、ノートは二十冊くらいになりましたが、作家になれるとは思わなくて、教員になりました。仕事に追われてすっかり忘れていたんですが、雑誌で童話のコンクールを見かけて、久しぶりに物語を書いてみたら、ちょっとした賞がいただけで、もう少し頑張ってみようと思えました。紆余曲折を経て、ようやく出版することができました。

い…私は「夢は童話作家」のわりに、全然書かなくて（笑）。高学年になると気が恥ずかしくなって、それも言わなくなりました。でも作文や感想文を書くことは好きだったので、ライターになりました。改めて物語を書くと思ったのは、子どもが生まれて児童文学を読むようになってから。私にも書けるんじゃないかと思って、書いては出版社に送って、いこうことをするようになったんです。

——物語は、どのように思いつかれるものなのでしょうか。

い…新聞で見た写真や目にしたニュース、身の回りにいる変わった人など、日々のちょっとしたことがお話のタネになることが多いでしょうか。

山…私もふだんから考えているんですけど、なかなか作品に結びつかない（笑）。一つのエピソードでポン！とお話書けるということではなくて、かけらを集めて物語をつくっています。『神隠しの教室』だと、「職員室に忘れ物取りに行ってくるね」と教室を出た瞬間に「もしここにいるはずのない教室があったら？」と思ったり、学校が急に静まりかえったときは「いま私はどこにいるの？」と思ったり、古くなった校舎が建て替えのために取り壊されるのを見たり。い…山本さんはプロットは考えますか？ 長いお話もたくさんありますが、辻褄が合わなくなることも、ありませんか？

山…あります（笑）。途中で「あ、プロットと違つな」と思って、少し戻って新しい登場人物を足したりすると、ガタガタッと崩れてきてしまつたり……（笑）。何度も書き直しました。みくさんは、プロットを立てないそうですね。い…そうですね。だから辻褄は本当に

合わない。戻っては書き直しです。でも山本さんもそつだと聞いて、ちよつと安心しました(笑)。

たいてい、「こんな世界やこんな子を書いてみたい」とぼんやりしたイメージで書きはじめるから、ずつともやもやしています。でも、だんだん「あ、この子はこんな子だったんだ」なんて見えてくるものがある。そのうち気持ちよくなる瞬間がくるんです。するとそつこがラストになって終わります。

——物語を書きたいと思っている子へのアドバイスはありますか？

山：友だちとケンカして腹が立ったことも、嫌な思いをしたことも、嬉しかったことも、ゼーンとお話のタネになるので、忘れずに憶えておくことだと思います。い：私もそう思います。そしてとにかくたくさん書けば、自ずと上手になります。あとは、自分がわからないこと、知りたいて思っていることを書くことですね。最初から言いたいことがわかっている話より、「どうなるんだらうっ？」と思いがら書く作品のほうが、書いている本人も、できあがった作品もおもしろくなるんです。脇役が意外に大切なキーマンになっていくこともあって、そんな瞬間が

お互いの作品を紹介していただきました

山本悦子さんの作品

『二年二組の』

たからばこ』

(佐藤真紀子／絵)



「よく落とし物をするたからくんのために、落とし物を入れる『たから箱』がある二年二組のお話。私はあまり学校が好きではなかったのですが、山本さんの作品を読むと、信頼できる友だちや先生がいる学校っていい場所だと思える。子どもたちの素直な気持ちを丁寧に描く、山本さんの優しいまなざしを感じます」

『神隠しの教室』

(丸山ゆき／絵)



「登場する子どもたちはさまざまな問題を抱えています。保健室の先生や母親も関係していて重層的。ミステリー要素も、児童文学としての奥深さもある。山本さんならではの発想のファンタジー作品です。山本さんの作品には実はファンタジーも多いのにそう感じさせないのは、学校や教室というなじみのある場面に印象的だからでしょうね」

いとうみくさんの作品

『天使のにもつ』

(丹下京子／絵)



「中学生の風汰が保育園に職場体験に行くお話。子どもたちに振り回されながらなじんでいく風汰が微笑ましい。保育園の子どもたちも保育士たちも、みくさんの作品の登場人物はみな魅力的で、気づくと好きになっていくんです。しおん君の抱える『にもつ』に気づいてからの風汰の心の葛藤には迫力や重みを感じられて、ラストは泣けました」

『糸子の体重計』

(佐藤真紀子／絵)



「ある章ではそっけないいじわるな子が、別の章では違う顔を見せていたり、いろいろな見方を重ねること子どもたちの本当の姿が見えてくる。しかし、だれがどう見ても変わらないのが、糸子さんですよね(笑)。一歩間違えると力サツな嫌な子になってしまつんですが、絶妙なバランスが魅力なんです」

楽しいんですよ。

山：よくわかります！「あ、この人はこのために出てきたのか！」と後から気づいたりするのは嬉しいですよ。だんだんある人物の新たな一面が見えてきて、それまでのことがすべてしつくりきた、といつこともあります。

——作品を通して今の子どもたちに伝えたいことはありますか？

山：なにかを伝えようと思っているわけではないのですが、子どものころ、おもしろい作品を読んだあとはすごくハイテンションになって、この感動をだれかに伝えたい！と思いました。私の作品を読んでもらう子どもたちにも、そんな気持ちを味わってもらえたら嬉しいですよ。い：私も「これを伝えたい！」というより、書きたいものを書いているのですが、読んだあとに、少し前を向くことができたり、希望を持てたり、「大丈夫」と思えたり——そんな余韻が残るといいなと思います。

——これからもお二人の作品がとても楽しみにです！ ありがとうございます。

自ら考える存在としての「子ども」

河野哲也

「道徳」の新しい授業が小学校で始まりました。文科省はこれまでの授業の形を大きく変え、子どもたち自身で道徳について「考え、議論する」ように求めています。この4巻のシリーズは、さまざまな道徳のテーマを、子どもたちが自分自身で考え、探求できるようにと考へて書きました。1人で読んでもよいですが、学校や家庭でみなさんで読んで、話し合ってもらえるように工夫しています。小学校中学年から高学年向けですが、もっと低年齢のお子さんでも利用できますし、大人が読んでも楽しめます。

近年日本では、道徳や総合的学習の時間などを中心に、「子どもの哲学」が注目されています。子どもの哲学とは、子どもたちが哲学的な問いについて自分たちで議論しながら探求する活動をいいます。1970年代にアメリカで開発され、現在、多くの国で実施されています。『小さな哲学者たち』というドキュメント映画をご覧になるとわかりますが、小学生も、もっと年少の子どもたちも「愛とは何か」「知性とは何か」「なぜ世界は存在するのか」「善悪の基準」「なぜ戦争は起きるのか」などといった哲学的な問いに、強い関心を持って議論に参加します。その内容も大人とほぼ遜色がありません。子どもというのは、これまで考えられていた以上に、しっかり思考し議論できる存在なのです。

本書では、この子どもの哲学の手法を用い、道徳の項目に合わせて、1~4巻のテーマをそれぞれ『自分のごもん』『家族・友だちのごもん』『社会のごもん』『命・自然のごもん』として構成しました。1、3巻の絵をはまのゆかさんに、2、4巻の絵をこばようこさんに描いていただきました。それぞれにとっても素敵な画風で、著者として本当に嬉しく思っています。

各巻では、「なんで勉強しないとイケないの？」など5つの問いをめぐって、キャラクターどうしで対話がなされます。その後に「きみのみんなの考えは？」「これも考えてみよう」コーナーを設けて、1人でもみなでも、いろいろ考えたり、議論ができるように工夫しました。巻末の「対話のやり方」では子どもの哲学の対話の進め方を紹介し、コラムでは対話で役立つ言葉や、社会と対話についてなど、いろいろなヒントを入れています。

私が実際に小学校で実践すると、先生方は、子どもがたちが大人が思う以上に深く物事を考えていること、ふだんは大人しい子がはっきりと自分の考えを述べることを知って、驚かれます。子どもを侮ら^{あなど}ず、1人の人間として対話してみてください。きっとお子さんの新たな一面を発見し、人間の尊厳と人格の独立性というものを実感できると思います。

(ここの てつや/立教大学教授)

「対話ではじめる 子どもの哲学
——道徳ってなに？」

河野哲也/著
本体価格 各2250円+税



①自分のごもん
はまのゆか/絵



②家族・友だちのごもん
こばようこ/絵



③社会のごもん
はまのゆか/絵



④命・自然のごもん
こばようこ/絵

にゃーこは畑がよく似合う

織茂恭子



『はたけのにゃーこ』

織茂恭子／作
本体価格 1300円＋税

猫にあまり興味などなかった。なのに突然、私達夫婦の畑に現れた子猫にたちまち心を奪われてしまい〈にゃーこ〉と名前までつけてしまった。

畑は山々に囲まれた農村にある。夜は真っ暗。月と星と猫の目が美しく光り輝く。こんな所でのにゃーこは何を食べて生きていくのか心配で、畑に行くときは食べ物も持っていくようになった。小さなお腹がぼんぼんになるまで一所懸命に食べて、食後はしなやかな身体でペロペロ毛繕いする。触れば柔らかくふわふわの毛が心地よい。そしてあどけない寝顔。にゃーこはこの畑にほんとによく似合う。耕したホクホクの土の上をころげまわってはしゃぐにゃーこ。バッタを空中でキャッチしてムシャムシャ食べるにゃーこ。カブトムシもクワガタもカリカリガリガリ食べてしまうにゃーこ。小鳥やネズミを捕まえて得意そうに見せにくるにゃーこ。ときにはひどい怪我をして死ぬかと思ったこともある。でもにゃーこには野生の血が流れている。静かに待てば自然に治ることを知っているようだ。

畑にはキツネやタヌキやアナグマもくる。みんなにゃーこより強そうだ。きっと怖いこともたくさんあるに違いない。そんな中で、精いっぱい生きているにゃーこ。かわいくて無邪気で淋しくても元気ににゃーこ。

私はそんなににゃーこの絵本を作りたいと思った。

(おりも きょうこ／絵本作家)

日本児童文学者協会が編集・発行している機関誌『日本児童文学』への連載をいとうみくさんに引き受けて頂いたことから、毎号、誰よりも早く天使たちに会うことができた。職場体験に保育園を選んだ、なんとも天真爛漫な中学2年生の風汰が関わる、園児たち、園長や職員たちとの触れ合いが新鮮で、いつも次号の原稿が待ち遠しかった。

「エンジェル保育園」での職場体験が始まる。園児たちとの出会いは風汰にとっては不思議体験だった。自己紹介後、園児たちに名前を連呼される。園で亡くなったチャボと同じ名前だったのだ。そのせいか、子どもたちから注意され、指導される関係になる。そんなおかしさ満載の物語だった。

しかし、風汰になついている「しおん君」と母親の関係を知っていくとき、脳裏に「虐待」の文字がよぎる。心配が限界に達した時、土曜日の保育園に向かっていた。風汰がリンダと呼んでいる保育士の林田がいた。風汰の心配や願いなど、とっくに読まれている。しおん君にいつか泥んこあそびをさせたいという強い決意に風汰は共感する。「お母さんたちの代わりはできないけれど、ほんの少し補うことはできる」と語る園長のすごさも目の当たりにした。現在の社会を賑わせている事件を思うにつけ、風汰同様、読者も考えさせられる物語であった。

(たかはし ひでお／日本児童文学者協会理事、『日本児童文学』編集長)

本物の天使に出会える物語

高橋秀雄



『天使のにもつ』

いとうみく／著
丹下京子／絵
本体価格 1300円＋税

3月の新刊図書!

ももんちゃん あそぼう

おんぶおんぶのももんちゃん

とよたかずひこ／さく・え

本体価格 800円+税



〈シリーズ20作め〉
だっこもいいけど
おんぶもだいすき!

どんどこ、めえめえ、走っていたら、ひつじさんがつかれちゃったみたい。「ももんちゃん おんぶ」だって。ももんちゃんがひつじさんをおんぶして走っていると、きんぎょさんやさきぼてんさんも「おんぶー」だって!?

知っておきたい! 慣用句・故事成語

それを知りたい! 慣用句

吉橋通夫／文

たかいよしかず／絵

本体価格 1980円+税



知っておきたい! 慣用句・故事成語

それがあったか! 故事成語

三田村信行／文

たかいよしかず／絵

本体価格 1980円+税



小学生で知っておきたい慣用句と故事成語。その成り立ちと意味、使い方がわかる、楽しい本です。そうだったのか! と「膝を打つ」おもしろさで、慣用句・故事成語の学習は「完璧」まちがいない!?



イラスト／高橋和枝

〔愛蔵版〕 シェーラ姫の冒険

シェーラ姫の冒険 (上)(下)

村山早紀／著

佐竹美保／絵

本体価格 各1800円+税



フォア文庫版刊行から20年、日本中の子どもたちを魅了した、剣と魔法の冒険ファンタジー。村山早紀の原点とも言える代表作を、装いも新たにお届けします。物語を読む喜びが味わえる、世代を超えて読み継がれる名作です。

2019年3月15日発行(毎月刊)

母のひろば 第658号
定価50円(年600円/送料とも)

発行所: 童心の会
〒112-0011 東京都文京区千石4-6-6
株式会社童心社内
電話: 03(5976)4187
03(5976)4402(編集)
編集発行人: 大熊悟
童心社のホームページ:
<https://www.doshinsha.co.jp/>
デザイン: 谷口広樹

定期購読のご案内

おハガキにてお申し込みください。下記QRコードからもお申し込みいただけます。見本誌(無料)と振込用紙をお送りいたします。

見本誌に同封されている振込用紙で購読料をお支払いいただけますと、手続き完了となります。購読料金は1年分600円(送料とも)。



あとがき

- 小学生の時、担任の先生が『猫は生きている』(早乙女勝元・作/田島征三・絵/理論社)を朗読してくれました。絵は全く見えない状態だったのに、自分も東京大空襲の現場にいるような臨場感で、まざまざと映像が浮かび上がってきました。そして戦争の無惨さが、痛いくらいに激しく胸に残ったのです。無差別爆撃の非人間的性を忘れてはなりません。 ㊦
- 通園の途中「うさぎさん、あった」と引き返して先割れの葉っぱを拾い、「ロッカーにいれようね?」で、おうちにもってかえろうね?」と何度も確認した娘。忙しい日々、自分は母でいられているのだろうか、とはっとさせられます。産休のため、本誌の担当は今号までとなりますが、皆様と共に、今後も子どもや母・父のことを考え続けてまいります。 ㊦